

## 愁想の「シルクロード」

新井 宏

高校生の頃からあこがれていた「シルクロード」を一度も訪れることもなくこの世を去ることになりそうである。しかし、そもそも実際にシルクロードに行けることなど、想像も出来なかつた世代なので残念だという気持ちもない。ただ、数多くの歴史エッセイを書き散らしているのに、なぜか「シルクロード」を主題としたものは記憶にないのが、我ながらやや不満である。

定年前後から妻と一緒にヨーロッパ諸国を廻っていた。そして、やっとトルコまでたどり着いたのに、中東や中国、印度は安全やトイレ事情等でなかなか同意が得られなかつた。その内に、家庭内の健康事情もあり、ますます「シルクロード」が遠くなり、友人達が楽しく語る「西域」に対しても、段々心弾まなくなっていた。

そこに登場したのが『まんじ』連載の村上邦治氏「安芸門徒シルクロード紀行」である。

最初は、村上氏が友人達と廻った旅行記だと思っていた。村上氏の友人が書いた蘊蓄あるエッセイも既に読んでいたので、軽く流して読みはじめた。

しかし様子が異なる。大谷光瑞等の評伝を通して明治維新の一側面を見事に描いているのである。

村上氏の前作「千家尊福伝」も、書き進むにつれて、単なる「千家尊福伝」を越えて、明治維新の一側面を深く描くようになっていた。そのような作風が好みの私は、単行本として世に問うことを薦め、余計なお手伝いもした。そう思ってみると、今度の「大谷光瑞伝」も同じ趣向なのである。

日本の「大乘仏教」はすべて中国で一度漢訳され導入されたものなので、ヨーロッパのように、パリー語や梵語(サンスクリ

ット語)の仏典から直接仏教の研究を深めた「小乗仏教」に較べ後ろめたさがあったという。

明治初期、廃仏毀釈やキリスト教解禁の流れに、危機意識をもった真宗大谷派の大谷光尊(光瑞の父)は、岩倉遣欧使節団に自ら同行する計画を立てていたが、二十世門主大谷広如の急逝により門主を継ぐことになり果たせなかった。その志を継いで、次期門主の新門大谷光瑞は、「大乘非仏教説」を打破することを心に秘めて、折からの中央アジア探検ブームに自らも乗り出すことを決心していた。

再び描く明治維新の側面である。しかも舞台は「未知、夢、謎、冒険」のシルクロードである。

「安芸門徒シルクロード紀行」はすでに八回の掲載を終えている。しかし、その間にコロナ禍によって、合評会が三回流れてしまった。いつも新たな刺激を求め、合評会の直前には各同人の作品を精読して臨んでいるが、流会が決まると、惰性で読みやすいものを斜め読みし、すこし手強いものは後回しにしてしまう。

そのためこの稿が載る今回は、同人各位の作品について、一年分をまとめて読んで合評会に臨まねばならないので気が重い。そんな中にあっても村上氏の「シルクロード」だけは各回精読している。

それと共に、私としては、今回は何を書いたら良いだろうか迷っていた。コロナウイルスの続編も書きたいが、まともにと

りあげるのは気分的に重い。

そこで思いついたのが、村上氏の「シルクロード紀行」を下敷きに、わが「シルクロードへの追想」を語ってみることである。

我々の世代、シルクロードといえば朝日新聞に昭和四十三年から四十四年にかけて連載された井上靖の『西域物語』を想うであろう。私はまだ単行本も出てない時に、畏友杉本正勝氏から、その新聞切抜きファイルをお借りして読んだ。

畏友などと気軽にいうが、一回り年上の会社の大先輩。その杉本氏が蛍光エックス線分析を日本で初めて工業用分析に導入しようと思戦苦闘していた際に、エックス線や統計学になじんでいた新入社員が私が職場も異なるのに勝手にお手伝いをしていた。それは氏がその成果を「博士論文」にまとめ上げる頃まで続いた。

その間に、博学多識な杉本氏から戦前の知識人の教養とも言うべきものを幅広く学んだ。いつも「歴史」は共通の話題であり、そのなかでも「シルクロード」を語り合うのは心躍る瞬間であった。私の「趣味の骨格」が定まったのは、全く杉本氏のおかげである。

井上靖は昭和三十三年に短編『楼蘭』、三十四年に長編『敦煌』を発表し、まさにシルクロードブームの先駆者であった。まだ学生であった私は、その頃に両書ともに読んでいた。

それが判るのは、昭和三十五年、東京宝塚劇場の菊田一

夫演出『敦煌』において初演直前に、主演の池部良が長台詞をこなせず、急遽無名の新人井上孝雄に替えられる事件があったからである。映画人の池部良にとつては、開演日ぎりぎりまで脚本が出来ず、稽古中に台詞を書き直すのが常の演劇には馴染めなかったのであろうが気の毒に思った。その後、池部良は篠田正浩監督の『乾いた花』で復活する。

『楼蘭』も『敦煌』も東トルキスタンすなわち今の中国の新疆ウイグル自治区のタクラマカン砂漠周辺が舞台で、いわばシルクロード中国側の入り口付近の物語である。それが当時のシルクロードのイメージであった。

しかしシルクロードブームを決定付けた井上靖の『西域物語』は、西トルキスタンすなわち現ウズベキスタンのサマルカンド等が主舞台である。当時、中国領であった東トルキスタンには入国できなかったが、西トルキスタンはソ連領で井上靖は昭和四十年と四十三年の二回にわたり旅している。だから楼蘭や敦煌を期待して読み始めると、やや雰囲気異なる。

物語は前漢の武帝や張騫で知られる汗血馬の大宛(フェルガーナ)から始まる。大宛は東西千キロメートルのウズベキスタンの最東端、中国圏に近く、戦前の教養人にとっては馴染みの物語で、ここまでが敦煌、楼蘭に続くシルクロードであった。しかし『西域物語』の大半は波乱のウズベキスタンの歴史とも言わなければならない。诗情豊かな井上靖の物語を期待して読むとちよつと手強い。

仮にシルクロードを長安からイスタンブールまでとすれば、その中間点はサマルカンドである。中国史として見るならいざ知らず、世界史のシルクロードの中心地はサマルカンドなのである。しかもウズベキスタンには、サマルカンド・ブハラ・ヒワ・タシケント等の世界遺産のオアシス都市がある。

その地はかつてソグディアナと呼ばれ、謎のソグド人が住み、シルクロードの東西交易を支配していた。

彼らは紀元前六世紀頃から既に交易に従事し、アレクサンダー大王遠征軍に征服されながらも、その後のグレコ・バクトリア王国、クシャナ朝、エフタル、突厥などの遊牧国家の支配下でも、侯国として独自の文化を築いていた。

しかし七世紀後半になるとアラブ帝国(初期イスラム帝国)の侵略軍による圧政が始まり、ソグド人達の反抗や集団逃亡が相次ぐ悲惨な状態に陥った。

ソグド人達が復活したのは、アラブ帝国がサマルカンドにイラン系サマン王朝を認めた頃からである。その頃になるとソグド人も他の民族との同化が進み、交易国際語のソグド語もだんだん死語と化していった。

近代になって、ソグド文字やソグド語の解読が進んだのは、インド・ヨーロッパ系言語であることに加えシルクロードからソグド語文書が大量に見えられたからである。

かくしてソグド人やソグド語は消え去ったが、サマルカンドは、イスラム連合国家とも言うべき強国ホラズム王国の「花咲ける都」となり、未曾有の繁栄時代を迎える。

しかし一二二〇年、西遼を滅ぼしてホラズムと国境を接するようになったモンゴル帝国が大兵团で攻め込んでくる。兵員数で勝っていたホラズムであるが、防御施設を持つオアシス都市で個別に迎え撃つ作戦を採った。しかしモンゴルは焦らず初戦のオラクルを五ヶ月の包囲の末に陥落させ、続いて周辺都市を各個撃破し大略奪を行う。

その後、ブハラやサマルカンドの拠点都市では、逃亡相次ぎ、降伏した兵士や市民の多くがモンゴル軍に編入されるか虐殺され、技術を持つ工芸家や職人はモンゴル王族や將軍に分配され、市街は徹底的に破壊され尽くされた。そして、サマルカンドはいったん歴史から完全に忘れ去られてしまう。

しかしサマルカンドは百五十年後、チムール帝国の首都として華麗に復活する。中国の陶磁器とアラブの顔料が融合して生まれた「青色タイル」が「地球上で最も美しい街」を飾っている。

ウズベキスタンの歴史を知ると、まさに岡田英弘が言うように、モンゴル帝国の西征により、東洋史・西洋史が統合され、初めて真の世界史が誕生したことを実感する。

それにしてもウズベキスタンの北側と南側を流れ、アラル海に消え入るシル・ダリアとアム・ダリアは、発音からして何故か魅せられてしまう。モスクワ経由のヨーロッパ便が生まれた頃、窓の黒い覆いをそと開けて砂漠にうねる大河を見たこ

とがある。シル・ダリアだったのではないかと勝手に思っている。

かくして、『西域物語』を読んでから、あこがれのシルクロードは、楼蘭、敦煌、亀茲にかわり、サマルカンド、イスファハン、イスタンブールとなった。そしてしばらくの間、モンゴル帝国の興亡について読み漁っていた記憶がある。

なぜモンゴルが強かったか、いろいろと学んだ。遊牧民の特徴として、騎乗疾走して敵に近づき、至近距離から両手を使って矢を速射し、疾走して去る。狩りのような戦法や偽装敗走をしては包囲する戦法など、戦闘にはめっぽう強かったばかりでなく、征服した地域から、職人・工人や軍勢まで巧みに獲得し、自軍を温存しながら戦線を拡大していった。更には、現地の色目人を高級官僚に据え、後の帝国の基礎を着々と築くなど、モンゴルは単なる蕃族などではなく、すぐれて政治的、文化的な集団であった。

次々に奪った攻城機等を改良し現地生産しながら進軍するのは、まさに武器の東西交流であった。モンゴル帝国のヨーロッパ侵攻によって、火薬や投石機などと共に、宋の高炉製鐵技術や大砲も伝わったのではないかとするのが私の「世界製鐵史観」である。

このように『西域物語』に描かれたシルクロードは、タクラマカン砂漠のシルクロードから、モンゴル帝国西征のシルクロード

に拡がったが、一般的な人気はやはり砂漠のシルクロードに留まっていた。

それから十年後、昭和五十五年に始まったNHK特集『シルクロード—絲綢之路—』はシルクロードブームを決定的なものにする。中国の長安(西安)を出発し、パキスタンとの国境パミール高原までの行程を毎月一編・十二回にわたって放送した番組である。NHK技術陣が総力を挙げて取り組んだ日中共同取材の映像は、喜多郎作曲の異国情緒あふれるシンセサイザーのメロディとともに、ロマンのシルクロードを日本に定着させた。

その人気によって、五年ほど経つと、もはやシルクロードは誰でも行ける観光地と化し、一般旅行者が押し寄せるようになった。

その頃、職場の部下が中国の『シルクロード』に行くこと休暇を申し出てきた。私の顔を見ながら申し訳なきさそうにしている。私のシルクロード趣味を知っていたからであろうか。お土産に、細工の優れた革製の鞆に、象眼のある金属製柄をつけた「小刀」を頂戴した。単なる「土産品」というよりは、焼き入れもしてあり「実用品」のようであった。今でも時々使っている。

NHK特集『シルクロード—絲綢之路—』は毎回二十パーセ

ント前後の視聴率を誇り、新聞に「巨人戦を見るか、シルクロードを見るか」という記事が載ったほどであったが、パミール高原が終点。そのため、視聴者から「シルクロードは中国だけではない。ローマに至る道である」という声も上がったという。私も同じことを考えていたので、当然のことだ。

それに応えて、昭和五十八年四月から翌年九月まで『シルクロード・第2部』十八回が放送され、インド、イラン、イラクと足を延ばしローマにたどり着いた。更に昭和六十三年には『海のシルクロード』も制作されたという。

もつともNHKは映像の『シルクロード』ばかりを追いかけていた訳ではない。最初の『シルクロード—絲綢之路—』が終わってまもなく、昭和五十七年に『NHK市民大学講座』が始まり、その中で『シルクロード文化史』二十六回を放送する。そして、その講義録がその翌年、長澤和俊著『シルクロード文化史』全三巻として白水社から出版された。

長澤和俊はシルクロード学者、市民講座では、はるかに広い地域や時代を対象に、より学問的な記述を行っている。ちなみに、『—絲綢之路—』の主要部分は、全二十六回の講演の内、第10回・謎の楼蘭王国、第11回・仏教の伝来、第12回・石窟美術の開花、そして第25回・中央アジアの探検があるくらいで、全体の六分の一ほどに過ぎない。やはりシルクロードは広大である。講演記録をもとにしたものなので、豊富な写真・図・表を使って平易な記述を行っているので読みやす

い。

さて、冒頭、この稿は村上氏の「安芸門徒シルクロード紀行」に刺激を受けて書きはじめたと述べた。しかし、ここまでは「日本におけるシルクロード」のイメージの変遷について私見を披露したのに過ぎない。

実は最初に漠然と想ったのは、私と仏教の関わり合いのことを、シルクロードに絡めて書いたら良いかなということであった。

いまでは確信しているけれど、私には信仰心が欠如している。昔、知り合いの僧侶から「新井さんは話がうまいからお坊さんになりなさい」と薦められ、すこし心が動いたことがあるがすぐ諦めた。しかし、信仰心がない割には、宗教に対する関心は高く、人生の節目〃〃に、宗教と交差することが多かった。

そもそも冒頭、高校生の頃からシルクロードに憧れていたと書いたが、それは理系志望なのに歴史が好きで、和辻哲郎の『古寺巡礼』や亀井勝一郎の『大和古寺風物誌』をかかえ、学割の夜行列車に乗って奈良に向かい、法隆寺、薬師寺、唐招提寺や東大寺戒壇院、三月堂などを歩き廻っていたからである。

『古寺巡礼』は、アジエンター壁画から、ガンダーラ、ペルシャ、ギリシヤへとまさに「シルクロード」への想いから始まっているし、

『大和古寺風物誌』もギリシヤ、ローマ、ルネッサンスの西洋美術への想いが下敷きとなっている。

私の場合、最初は古寺建造物に対する興味であつたが、エントランスのルーツがギリシヤにあると知り、シルクロードに思いを馳せた。それと同時に奈良南都六宗の伝来にも興味を持ち、判りもしないのに大野達之助の『日本仏教思想史』を読んでいた。

その後、建築様式への興味は建築モジュールの研究につながり、ライフワークの「古韓尺」を提唱するに至っている。

大学時代には、「科学と宗教」と題する本がいくつか出版され、ちょっとしたブームであつた。その中には創価学会の池田大作の「科学と宗教」もあつたので読んだ。関連して「創価学会史」も学んだ。その頃、創価学会の「折伏」には嫌悪観をもちながら、キリスト教やイスラム教との比較で、宗教活動の本質はむしろ「折伏」にあるのではないかと想った。

社会人になってまもなく、突如として「英会話」を勉強しなければと思ひ立った。それまでは、英語の試験のない大学を志望するとか、英語の配点が極めて低い大学に行くのだと公言して、その通りにして、D・Hロレンスの『チャタレー夫人の恋人』を原文で読むことを以て免罪符にしていた。

「英会話」のきっかけは、会社でGEの技術者による「原子力発電」の講演があり、水野誠常務が英語で応対しているのにびつくりしたからである。水野氏は紀州藩御付家老、三万五

千石の新宮水野家の直系十四代、工場には馬に乗って通勤していたとの伝承もある方である。とても穏和な方で、氏の博士論文の執筆をお手伝いしたことなどから、退任後お亡くなりになるまで、個人的なお付き合いがあった。新宮水野家祖先の菩提を弔いながらも本人は敬虔なクリスチャン、ご心労もあつたと聞く。

新宮水野家十代の水野忠央は大老井伊直弼と組んで紀州藩の慶福を徳川十四代將軍家定とした人物。吉田松陰も「水野奸にして才あり、世頗るこれを畏る……また一世の豪なり」と評している。水野氏の奥様は生田流箏曲家元の富山清琴の直弟子とのこと、どこかのお姫様だったのであろうか。

英会話を始めるに際しては、「個人教授」と決めていた。当時、初任給に毛の生えた程度の給料だったので、週四回のレッスンを支出するのは、かなり負担だったが、個人教授なら「休めないし授業料も惜しい」ので続けることができるとの歯止めをつもりであった。「将来、海外旅行に行つて三倍楽しんで元をとる」というのが、自分に対する言い訳であった。

その結果、ケン沖山先生に出会った。最初は日系将校OBとばかり思っていたが、スリランカの大僧正の息子(隠し子か)だという。小乗仏教の発祥地に近く、ドイツの仏教学者に友達がいるという。私の英語力では仏教の話はほとんど理解できなかつたが、結婚するまで教えていただき、結婚式にも出席していただいた。

それから妻の実家が熱心な法華経信者で、妻も私をなんとか信者にしようとなつて努力していた。世間体としての最小限の歩調は合わせていたが、信者にはとてもなれそうになかつた。ただ、経典や読経には興味があつたので、今でも法華経は、ルビの付いた経巻があれば、格好の付く程度には詠める。訳の分からない梵語の御経が一番有り難そうに感じた。

その延長で、私が韓国慶尚大学の招聘教授として、家を留守にするにあつて、妻からは、帰ってきたら身延山に登つて修行することが条件つけられた。ただし韓国の寺院で修行するのも良いというので、友人の教授に伝手を求めたところ、尼寺ではどうかと言われたが、さすがに止めた。

その代わりというのもおかしいが、韓国にいる時にたまたま「仏教の本」を二冊頂いた。

一冊は、私の学生だった河童仁さんが、私の誕生日に贈ってくれた、曹溪宗の改革の中心人物・道法僧侶が書いた『私が見る仏』という本。もう一冊は慶尚南道の多率寺の僧侶から頂いた曹溪宗第七代宗正の性徹僧侶の『永遠の自由の道』という本である。

身延山での修行に全く心が動かなかつたわけではないが、修行中禁酒という条件がつくのを警戒していた。この二冊を日本語に翻訳することで、身延山の修行の代替えとするのは悪い話ではない。いずれも二百ページ弱の著書で、結局半年近くかけてなんとか完訳。もちろん出版に至るような機会はなかつた。しかし、翻訳と言うのは、読むだけでなく、自分の

頭でいったん理解してから書き出す作業で、随分勉強になった。

こんなことをだらだら書いていると、やはり私には宗教心が欠如しているのを改めて実感する。

最初、本稿の仮題を「あこがれのシルクロード」としていた。しかし如何にも陳腐である。感覚としては、郷愁やノスタルジックに近いが、今度はシルクロードと合わない。無理に造語として「愁想」としたのは、結局「絹の道」にも「仏の道」にも踏み入ることなくこの世を去ることになりそうな寂しさ侘しさを表わしたつもりである。それでも「絹の道」や「仏の道」は私の人生を豊かにしてくれたと想っている。

その点、「安芸門徒シルクロード紀行」を読むと、村上氏は全く異なる。

第一、冒頭の文章からして、

僕は「安芸門徒」だ。

で始まっている。堂々とした「門徒」宣言である。

自己紹介を読むと、

僕自身は郷里には七歳までしかおらず、あまり熱心なほうではないが、我が家は数百年続いている代々浄土真宗の門徒である。

とある。軽く数百年というが、それだけでも大変なことだ。

その上、本稿シルクロード探索の主人公とも言うべき渡辺哲信と哲乗の兄弟は、村上氏の郷里竹原市に隣接する三原市浄念寺出身である。

またもうひとりの主人公、堀賢雄も、村上氏の菩提寺住職が堀賢雄の孫、豊田山蓮照寺住職堀忠雄と龍谷大学の同期生で、その縁から、村上氏は堀賢雄の日記をはじめ多くの資料や写真を譲り受けている。そのお陰で、渡辺哲信と堀賢雄の手記がそろい、かれらの探検旅行がより正確にたどれるようになったという。

それにして村上氏はもはや完全な宗門の専門家扱いを受けている。まさしく「安芸門徒」である。

「安芸門徒シルクロード紀行」はまだまだ続くようである。ぜひとも『千家尊福伝』と同様、『大谷光瑞伝』としてまとめあげてほしいと願っている。